発行日 令和６年５月１日

あのころの稲佐の浜

会長　江口博晴（高校十期）

孫たちが帰省するのを待ちかねて、私は稲佐の浜へ海水浴に行くことにしていたものだ。波打ち際ではしゃぐ孫たちの甲高い声を耳にしながら目を閉じると、子供の頃の稲佐の浜の景色が浮かんでくる。ずっとこうしていたいと暫く思い出の波の中でたゆとう。遠浅で、強い西風が吹かない限り波も穏やかで、あんな素晴らしい海水浴場はないのである。それが、最近の稲佐の浜は変わった。海水浴客は数えるほどで、目立つのは弁天島のあたりでは日傘を持ったたくさんの観光客と思しき人たちが行き来しているのである。

先日、何枚かの写真の中に、稲佐の浜で海水浴をする沢山の人たちを見た。弁天島があれだけ沖の方にあるから、昭和三、四十年代の頃か。島の周囲は渦を巻いているので、絶対に近づくなときつく言われたものだ。それにしてもこの人出は何だろう。このころの子供たちが、戦後の日本の高度経済成長を支えた世代なのだと思えば、何とも印象深い写真である。

ちなみに私には今も諳んじて歌える歌が二曲ある。島根県民歌と、そして大社高校校歌である。校歌二番冒頭に歌う「薗の長浜砂白く潮騒とよむ海の音」という歌詞こそは大社を故郷とする者たちにはこの上もなく懐かしく、拝みたくなるような夕日はまさしく日本の渚百選というにふさわしい。名曲である。

あのころの稲佐の浜は海水浴客を、今の稲佐の浜は出雲大社の素鵞社にお供えする砂を掬う観光客を包み込んでいる。故郷の風景が変わっていくのは寂しいことではなく、新しい時代に引き継がれていく希望なのだろう。

神迎の道へ ようこそ ようこそ

神迎の道の会　会長
青木 敦生 氏
（高校四十六期）

清々しい風の吹く稲佐の浜。穏やかな日本海が私たちを迎えます。出雲大社が平成の大遷宮を迎えてからは、この浜にも全国から多くの人が集うようになりました。

古事記や日本書紀、出雲国風土記に書かれる国引き神話や国譲り神話の地であり、旧暦十月十日の夜には八百万の神々をお迎えする「神迎神事」が執り行われる神聖な浜でもあります。

浜では、砂を袋に納める方が大勢いらっしゃいます。出雲大社御本殿の背に位置する素鵞社にその砂を供えて、また代わりの砂を頂きます。その砂を持ち帰り家屋や田畑の四方に撒き土地を清める以前からの風習に加え、今では身に着けてお守りとされる方が多くなってきました。

「潮汲」

稲佐の浜では、竹で作られた潮汲箍の柄を持ち海に投げ入れて海水を汲み取ります。笹の葉をその汲み取った海水に浸し、その滴を自らの身に左右左と撒いて清めます。出雲大社をはじめ荒神社などの御神前でもその都度同じようにして身を清め、二礼四拍手一礼の作法でお参りします。そしてその潮水を持ち帰り、家屋や家族にも撒いて清めます。これは大社町杵築地区で古くからおこなわれている禊の風習です。

最近では潮汲をされる方が僅かになってきたので、私たちの「神迎の道の会」では、由緒あるこの風習を大切に守り、後々に繋いでいこうと、出雲大社への「ついたちまいり」に併せておこなっています。大社ならではの風習に、親子揃ってや他地域から参加される方もいらっしゃいます。「お参りをした後の心がすっきりして気持ちが良く、清々しくなって来るから」「これまでのひと月の感謝と、これからのひと月が安らかで穏やかに過ごせるように」などと、毎月続けられる方もいらっしゃいます。早朝の境内や、私たちにとっては何気ない街の景色に大社らしさを感じられて喜ばれます。このように次の世代へつなげることや他地域との繋がりが生まれることをとてもうれしく頼もしく思っています。

稲佐の浜で潮汲箍に海水を汲みます

「神迎の道」

それでは、稲佐の浜から出雲大社へと杵築の街の中を進みましょう。

最近では、わざわざ神々の集う稲佐の浜へ立ち寄り、御神幸される道を同じく通って出雲大社へとお参りされる方が多くなりました。

稲佐の浜で迎えられた神々は、神籬に宿り絹垣で囲まれ、龍蛇神を先導に、神官の「おー」という警蹕と厳かな笛と太鼓の音が響くなか、大國主大神の御座します出雲大社へと向かわれます。沿道には注連縄が張り巡らされ、日常とは打って変わった厳かで神聖な道になります。また家々では灯りを一切消し、静かにしてお通りになられるのをお迎えします。

この道は「神迎の道」と呼ばれます。神迎の道に連なる民家や商店には、軒下に竹製の花器が下げられています。この花器は潮汲箍を原型にしています。道行く人に気持ちよく歩いて欲しいと季節の山野草を生け、ささやかなお迎えの、おもてなしの気持ちを表しています。これは何かとお尋ねの方には、潮汲の風習や神迎の道のこと、神在月の過ごし方などをご紹介して話が弾みます。その反応に、自分の住む地域の魅力に改めて気づかされます。いわば、この花器が訪れる方と住む者とを繋ぐ大切なものになっています。

神在月の期間や大型連休には、空き家などを利用してお休み処を開いています。訪れる方に腰かけていただき、私たちとゆっくりと茶飲み話に花を咲かせて、ガイドブックには載っていない出雲を知ってもらいます。「神在の期間中は、神様の会議のお邪魔にならないように、騒ぎはせずむやみに夜も出歩かないようにひっそりと謹んで過ごします。」などと、今でも親から子へと伝え続けられているしきたりをお話しします。神話伝承に出てくる場所や神様が祀られる神社が身近にたくさんあることや、その中で禊の風習が代々続けられていることに驚かれます。住む者が個々の言葉でここの話をする、そんなことが大変喜ばれて、毎年続けて立ち寄られる方もいらっしゃいます。訪れる方との出逢いによってこの地域の魅力に共感することが、あらためて足元を見るきっかけになっています。

おもてなしの花を潮汲箍にいけます

「神迎の道の会」

このような活動をしております「神迎の道の会」は、二〇〇六（平成十八）年に板垣典行氏（高校三十五期）が設立しました。大社町杵築東地区（四ツ角、元町、中町、大鳥居、御宮通りの町内）のご婦人方が力強く心強く中心となっています。

活動する自身が楽しめていること、提案者が率先して行動することが約束で、女性でも細腕に鋸やドリルを持ち、心を込めて、潮汲箍や花器を作っています。

自らの住むこの地域への誇りを再認識し、伝統と文化を次の世代へ繋げること、訪れる方との温かな交流を生み育むことを目的に活動しております。全国津々浦々から縁あって私たちの町を訪れる方には、会員の笑顔や姿勢に出逢っていただきたい、そして、多くの人たちに大きな安らぎをもたらしてきた私たちの町の誇りを、自分たちのあとの世代にもずっと伝えていきたい、それが一番の願いです。

会員が心を込めて潮汲箍を作ります

神迎の道の会ホームページ
http://www.kamimukaenomichi.com

神迎の道の様子や会の活動は、ホームページでも紹介しております。（アドレスは右下）
神様も皆様も神迎の道へいらっしゃいませんか。
心よりお待ちしております。

令和五年度松江いなさ会総会記念講演

「華岡青洲の真実」

前公益財団法人いづも財団事務局次長
梶谷（かじたに） 光弘（みつひろ） 氏（一九五二年 大社町生まれ）

今回の梶谷先生の講演は、二〇二〇年の総会での開催を予定していたものですが、ご存じの通りその年に世界中を巻き込んだコロナウィルス感染という大きな災害が発生し、その後、何度かの延期の末にようやく実現しました。

講演のテーマである華岡青洲は、江戸時代の医者で、母親と妻の献身的な協力による人体実験の末に全身麻酔薬「麻沸散（まふつさん）」を生成し、それを用いて世界で初めて乳がん手術を行ったことで知られています。

今回、梶谷先生のお話では、乳がんの症状が歴史上に現れたのは紀元前四世紀のことのようですが、十九世紀に至るまでは不治の病でした。青洲は、オランダ医学を学んだ日本人の医者が著した医学書の中に「早い段階であれば切って取り除けば治る」という記述があるのを見て、麻酔薬の開発とそれを用いた手術法の研究に取り組み、乳がん手術を実施する八年前には人体実験も終え、麻酔薬は完成していたようです。

そして、有吉佐和子さんの小説『華岡青洲の妻』では手術年が文化二（一八〇五）年となっていますが、実際は文化元（一八〇四）年だったこと、麻酔薬はオランダ人の情報を基にしてすでに十数人が開発を行っており、青洲は麻酔の効き目を強めるため朝鮮アサガオの花の部分ではなく茎や根を使用し、その副作用を弱めるために烏頭（うず）（トリカブト類の根）を加えたため妻の加恵が視力を失ったことなどを話されました。

驚いたことは、その最初の乳がん手術の記録が残っていることでした。また、術後四か月後の文化二年二月に患者が亡くなっていたことでした。

梶谷先生の調査によると、華岡家には明治十五（一八八二）年までに二二五五名の医者が入門していましたが、乳がん患者が亡くなった年は誰も入門しなかったようです。やはり、医者も乳がんは「治せない」「治らない」と思ったことでしょう。

世界初の全身麻酔による乳がん手術（１８０４年）

しかし、その後、早期発見が乳がん治療の鍵になることがわかり、手術前の診断が詳しくなると、術後長生きをする患者が次々と現れるようになりました。そして、全身麻酔薬は救急医療にも用いられるようになり、華岡流医術は隆盛していきました。私たちの故郷出雲国でも幕末には華岡家で学んだ門人が乳がん手術を成功させており、乳がんは治療すれば治癒することが認識されるようになりました。

こうして、講演では、華岡青洲が行った麻酔薬による乳がん手術は、近世と近代の橋渡しをしたという史実を聴きました。他方、有吉佐和子さんが小説で描いたフィクション部分がより一層明確になりました。そして乳がん手術の様子がスライドで紹介されましたが、昔も今も女性にとって大変な病であることを痛感させられました。医学の発展に貢献してきた偉人の努力と私たちの健康について考える良い機会となりました。

（文責　今岡）

松江で活躍する
大社高校ＯＢ訪問記

株式会社さんびる　松江歴史館分室　支配人
平井（ひらい） 利和（としかず） 氏
（高校四十六期）

松江に再び観光客が戻ってきました。コロナ禍が一段落し、国内からだけでなく海外からもたくさんの観光客が松江城を訪れています。その松江城の東隣にあり、城下町松江の歴史を伝える松江歴史館に大社高校ＯＢがいると聞いて訪ねてきました。

にこやかに迎えてくれたのは松江歴史館の管理運営を引き受けている株式会社さんびるの平井利和さん。見るからに健康的なスポーツマンの好青年です。大社高校サッカー部出身だそうで、大社のどこの生まれかと聞けば、これが松江市のど真ん中の内中原町とのこと。松江一中時代には島根県大会で優勝したという実力の持ち主。それがどうして松江から大社高校へ行くことになったかといえば、大社高校サッカー部の、あの紫色のユニフォームに憧れたからなのだそうです。中学校の進路指導の先生に松江北高でなくて、どうして、大社高校なのかと何度も聞かれたそうですが、彼の決意は揺るがず、大社高校にサッカー留学。しかし皮肉なことに中学校時代のサッカー仲間は松江北高に進学し、三年後の大会の決勝戦で大社高校は松江北高に敗北。インターハイへの出場を逃したそうです。いやはや、青春のドラマですね。

福岡の大学を卒業してからは、大阪でスポーツクラブのインストラクターをしたのち、米屋に転身。体力を生かしてお米の配達をしたかと思えば、今度は、大阪は下町の金属メッキのベンチャー企業で品質管理に専念するという仕事を経験されました。職歴に一貫性は見当たらないものの、マニュアル通りではなく、人と接することが大好きという姿勢は変わらなかったとのこと。そろそろ郷里の松江に帰ろうと思った三十五歳の頃に出会ったのが株式会社さんびるの社長さんだったそうです。

さんびるでの業務は松江テルサのスポーツクラブ運営やイタリアレストランの経営など新規事業に全力投入だったそうですが、コロナ禍での経営に大変な苦労をされたようです。そして今は松江歴史館の管理運営の責任者さんです。どうやら社長さんに見込まれて、新規開拓のたびに白羽の矢が当たっているみたいですね。

松江出身の大社高校ＯＢの平井さん、次にお会いする時にはどんな新規事業を担当されているでしょうね。これからの活躍を期待していますよ！！

（文責　今岡）

母校だより

第62回島根県高等学校音楽コンクール

大会日　9月12日（火）
開催場所　島根県民会館大ホール
大会結果　声楽の部　1年　田中　廉三　金賞

【顧問より】体調管理など難しい状況でしたが、全員自分の今できる最高の演奏ができていたと思います。特に１年生の田中君は金賞を受賞することができました。この経験を生かして合唱部でもたくさんの歌をうたって多くの人に感動していただけるよう、頑張っていこうと思います。（大社高校ホームページ）

1．進学状況（合格延べ数・過年度卒業生を含む）

		令和３年度	４年度	５年度
大学	国公立	74	68	71
	私立	223	228	200
短大	公立	13	18	6
	私立	12	6	10
高看		21	14	18
合計		343	334	305

2．就職状況

	令和３年度	４年度	５年度
公務員	7	14	5
民間事業所	4	8	3
合計	11	22	8

大社高等学校校歌

巻頭文で校歌二番の一節が紹介されていましたが、校歌についてはこんな逸話があります。

薗の長浜砂白く
潮騒とよむ海の音
波はいはほにくだけ散る
島根のはてにゆるぎなき
学びの園のめでたさよ
清き平和と友愛の
いのちみちたりこの園に

歌詞ができたから作曲を世話してくれというので、日本一の作曲家にと考え、東京芸術大学の下総皖一教授にお願いした。…（昭和）二七年早々に、今の竹友藻風作詞、下総皖一作曲の校歌が完成した。二七年三月、高校四期の卒業式に、初めて式歌として公に発表された。当時の世評は「芸術的で、品のある、すばらしい校歌」と好評であった。

（大社高校講師　中出弘氏の談話
大社高校百年史507頁）

体育科創設五十周年を迎えて

鬼村　純（体育科一期）

昭和四十八年四月、スポーツでの優れた選手と指導者の育成を目標に、全国でも珍しい体育科が創設されました。一期生として入校できた夢と喜びはありましたが、同時に計り知れないプレッシャーを三年間持ち続けました。自分たちが大会や学業で出す成果が「将来の体育科を大きく左右する」との思いです。全国大会出場は最低限のノルマ、授業でも失敗は許されない。先生方の思いも同じであったと思います。一期生はテスト生とも言われた所以だと思います。この経験から強い「絆」が生まれ、現在もよい付き合いをしています。

五十年の間に幾度となく廃止の声を耳にしましたが、教育関係者及び後輩たちの努力により、今日を迎えられたことを心から感謝しています。今後益々の後輩諸君の活躍と体育科の発展を祈念申し上げます。

表紙に寄せて

板垣　宏（高校七期）

薗の長浜のイメージ写真を探していると、海水浴客でにぎわう稲佐の浜の写真が出てきた。別の一枚は弁天島のはるか向こうに三瓶山がかすかに映る写真であり、まさに薗の長浜であったのだが、妙にこの海水浴の写真に惹かれた。砂の熱さまで思い出せそうだ。読者の皆さんに何年頃の写真なのか推察してもらいたい。来年号までのクイズとすることにしよう。

会務報告

事務局長　糸賀耕一（高校十九期）

長らく新型コロナウイルス感染症に振り回されましたが、令和五年五月八日以降、インフルエンザなどと同様の第五類に移行されたことを踏まえ、令和二、三、四年と三年間もできなかった総会を久しぶりに六月十七日に行うことができました。

参集する方の高齢化を勘案して、今回の総会から開始時刻を早めました。参加者は二十三名と多いとは言えなかったかもしれませんが、対面で交流することの喜びをかみしめた有意義な集まりになりました。

令和五年度の事業

▼令和五年四月二十九日　会計監査

▼令和五年四月二十九日　第一回役員会

前年度の事業報告・決算報告、本年度の事業計画・予算案　承認。役員改正案　承認

▼令和五年五月十日

総会案内のお知らせ、会費納入お願い、会報三十四号を発送。

▼令和五年六月十七日　第三十四回総会

於　サンラポーむらくも

参加者　二十三名（来賓四、会員十九）

▼令和五年十二月二日　第二回役員会

本年度会計中間報告・本年度事業中間報告。来年度総会・懇親会について協議。

同日　会報三十五号編集委員会

▼令和六年三月二日　第三回役員会

会計中間報告。令和六年度総会について。来年度の事業計画・予算案　承認。

同日　会報三十五号編集委員会

令和５年度松江いなさ会決算書

収入総額	541,225円
支出総額	277,285円
差引金額	263,940円

１．収入の部

単位：円

項目	本年度予算額	本年度決算額	増減	摘要
会費	200,000	174,000	▲26,000	@2,000×87名
寄付金	60,000	55,000	▲5,000	いなさ会、県庁いなさ会
雑収入	777	2	▲775	普通預金利息
繰越金	312,223	312,223	0	
合計	573,000	541,225	▲31,775	

２．支出の部

単位：円

項目	本年度予算額	本年度決算額	増減	摘要
会議費	30,000	16,933	▲13,067	役員会、役員会会場費等
事務費	40,000	35,049	▲4,951	通信費、事務用品、消耗品等
事業費	350,000	213,590	▲136,410	会報発行費、取材費、会費納入願い郵券等
慶弔費	20,000	0	▲20,000	
雑費	30,000	11,713	▲18,287	振込手数料等
予備費	103,000	0	▲103,000	
合計	573,000	277,285	▲295,715	

基金積立金現在額　200,000円

令和６年度松江いなさ会予算(案)

１．収入の部

単位：円

項目	前年度予算額	本年度予算額	増減	摘要
会費	200,000	200,000	0	@2,000×100名
寄付金	60,000	55,000	▲5,000	
雑収入	777	60	▲717	預金利息等
繰越金	312,223	263,940	▲48,283	
合計	573,000	519,000	▲54,000	

２．支出の部

単位：円

項目	前年度予算額	本年度予算額	増減	摘要
会議費	30,000	30,000	0	幹事会、役員会、事務局費等
事務費	40,000	40,000	0	通信費、事務用品、消耗品等
事業費	350,000	350,000	0	総会、会報発行費等
慶弔費	20,000	20,000	0	
雑費	30,000	30,000	0	振込手数料等
予備費	103,000	49,000	▲54,000	
合計	573,000	519,000	▲54,000	

基金積立金現在額　200,000円

今年度の総会　御案内

日　時　六月二十二日（土）
総　会　午後一時から。
記念講演　午後二時から。
懇親会　午後三時から。
懇親会会費　五千円。

会　場　サンラポーむらくも（松江市殿町）

記念講演　講師と演題

島根県健康福祉部　地域医療対策監
木村（きむら）　清志（きよし）氏（高校　二十七期）
「島根県の医師確保に携わって二十年」

講師紹介

昭和三十二年一月　大社町生まれ。
昭和五十六年三月　自治医科大学卒業。
令和四年三月まで　島根県立中央病院、隠岐病院、島根県成人病予防センター、掛合診療所、島前診療所、島根県健康福祉部、島根あさひ社会復帰促進センター診療所に勤務。
令和四年四月から　現職。

講師からのコメント

医師を「呼ぶ」「育てる」「助ける」をキャッチフレーズに県庁で仕事をして二十年、あっという間でした。
スーツ姿で一畑電車に揺られ、パソコンに向かって手を動かす、周りはみんな行政職、田舎医者の私にとって全くの別世界でした。
議会答弁も経験し、県内の市町村長さんとも頻繁に意見交換をしていますし、島根大学医学部教授や県内病院の院長先生などとも情報交換をする機会が多くあります。
なぜに県庁、そこで何をしてきたのか、この度の講演でお話しさせていただきます。

松江いなさ会役員名簿
（二〇二三年総会～二〇二六年総会）

顧　問　小豆沢万里子（高校　三期）
　　阿部　英悦（高校　七期）
会　長　江口　博晴（高校　一〇期）
副会長　金築　孝（高校　一九期）
監　事　伊藤　善章（高校　一二期）
　　桑本　毅（高校　一三期）
幹　事　加藤　義文（高校　一〇期）
　　肥後　宗一（高校　一〇期）
　　布野　正則（高校　一五期）
　　安達　幸子（高校　一六期）会報委員
　　奥村　俊介（高校　一八期）
　　宍道　正年（高校　一八期）
　　糸賀　耕一（高校　一九期）事務局長
　　長谷川博子（高校　一九期）会報委員
　　出川　弓子（高校　二〇期）会報委員
　　引野　律子（高校　二〇期）会報委員
　　山川　立夫（高校　二三期）
　　今岡　克己（高校　二四期）会報委員
　　千家　充伸（高校　二六期）
　　鬼村　純（高校　二八期）
　　中澤　信善（高校　三四期）
　　大谷　幸生（高校　三六期）

皆様へお願い

松江いなさ会は、皆様からお納めいただく会費で運営しており、御協力いただいておりますことに、厚く御礼申し上げます。
年会費は二〇〇〇円、納入期限は、十二月末日でございます。昨今、諸経費の高騰もあり、会計事情は極めて厳しくなっています。何卒、会費納入を宜しくお願い致します。

編集後記

世はまさに生成ＡＩ一色の時代である。世界中の知識を詰め込んだサーバーから、新しい小説も音楽もイラストも動画までも、ボタン一つで引き出せるというのだから、たまげたものだ。鉄腕アトムを見ながら育った私らも追いついていけるのであれば、きっと来年号の会報誌は全て生成ＡＩが編集してくれているはずだ。
今岡克己（高校二十四期）